

主体的に学習に取り組む態度の評価について

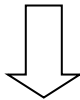
今回の学習指導要領で登場した「学びを調整する力」。実は、欧米では1990年代～2000年代にかけて、心理学の分野を中心の自己調整学習の研究が進められていて、たくさんの先行研究があります。そこで、自己調整学習に関する先行研究を手掛かりに、「自分で学ぶ（学ぼうとする）力」の評価や見取りをどのようにすればいいのかを探ってみましたので、参考にしてみてください。

○「主体的に学習に取り組む態度」の評価について

- ①「粘り強い取組を行おうとする側面」（知識及び技能、思考力、判断力、表現力等を身に付けることに向けて粘り強い取組を行おうとする側面）
- ②「自らの学習を調整しようとしている側面」（自らの学習状況を把握し学習の進め方について試行錯誤するなど）

評価のためのキーワード

・見通し ・計画 ・さらに調べたいこと ・よりよく ・振り返る ・見直す など



・①②どちらにも当てはまる言葉ばかりだから、分けて考えなくていい
・そもそも主体的に学習に取り組む態度という言葉が分かりにくい ので

- 「**自分で学ぶ（学ぼうとする）力**」と考えればよいのではないかと、つまり、学ぶスキル（情報収集・整理・分析、思考の仕方や学び方など）がどれだけ備わっている（発揮できる）のかと考えるとよいのではないかと、2つの側面と言いつつ、2つは連動しているものであり、線引きできるものではない。（自分との関わり・他者との関わりを通して身に付けていくもの）
- 単元によっては、「**生活に生かそうとする力**」も入ってくる。（社会ならば、選択・判断場面、また算数、理科、家庭科は特に多いと思われる）



「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」それらを身に付ける（身に付けようとする）ための「**自分で学ぶ（学ぼうとする）力**」の3観点と考えれば、主体性が他の評価とも連動していることが分かるし、見取る観点もイメージしやすいのではないだろうか？

自己調整学習（学び方を学ぶ学び、自ら調整しながら進める学び、主体性をもった学び）

いくつかの先行研究より、自己調整学習の流れは以下のように考えられます。

1. 課題の把握とゴールの設定
2. 計画の作成（を通して学習への見通しをもつ、自己評価規準の曖昧さの解消）
3. 計画に沿った学びの実行
4. モニタリングによる再学習、考えの再構成、自己の考えと対峙する時間（3・4は行ったり来たりするものである）
5. 最初のゴールと現時点で到達したゴールの比較による自分の位置、立場の自覚
6. 1～5についての検証（どのように学んだかの省察）

これは今求められている授業改善とほぼ合致する点からも「自己調整学習」について考察することは妥当であると判断できる。

「自ら学ぶ力」をつけるために、重要なのは1～6のどこだと考えますか？これを考えることが、今求められている授業改善につながるはずです。

「自ら学ぶ力」をつけるためのポイント

- **段階6**が抜けていることはありませんか？（恥ずかしながら私はよくあります・・・）この**段階6**がないために、その子の学習の仕方が変更されないのです。その結果、段階2・3・4で誤った学び方、効果的でない学び方が次もまた繰り返されてしまうのです。どれだけ頑張っても、学び方が効果的でなければ、結果はでませんよね。

⇒「自分で学ぶ力」を高めるために、自己のここまでの学び方を振り返る時間が必要である。

- **段階1**において、もし学習者たちが課題やゴールを間違えて知覚すると、どうなるでしょう。学習者たちは、目標の実現の役に立たないことが決定的なメタ認知的コントロール（自己を客観視し、できることを考えること）をすることになってしまう。

⇒ここで問いは届いているかの確認するために、その先の見直しを考える時間が必要である。

- **段階4**において、再学習する際に、子どもたちは、すらすら読めることと、理解していることを取り違える問題が生じていることがある。例えば、最初の難しかった言葉、知らなかった言葉や事象は1度で理解ができていない。だから、再学習（復習、見直しと言えば分かりやすい？）するのだが、再学習の際は、1度見たり聞いたり読んだりしているから、1回目より障害にぶつからないため、理解しているという錯覚を起こしてしまう。

⇒他者と比較したり、自分で問い直したりして、自己の考えを見直す時間が必要である。

「自分で学ぶ(学ぼうとする)力」をどこで見取る？どうやって見取る？

- 段階1・2：**単元の導入時の様子** 課題を見出す場面を設定。それに対して根拠のある予想や仮説、課題を解決するための計画を作成する場面（思考・判断・表現の見取りとして記録、連動して見取る）
 - ・見出した課題は、出会った資料や事象と連動しているか。
 - ・調べたいことや計画は、課題と連動したものになっているか。
 - ・学ぶための選択肢を持っているか。（教科書や資料集で調べるも選択肢である）
 - ・自分で選び、決めようとしているか？
（黒板に書くまで何も書かないのは、考えようとする意欲がないか、選択肢がなく、「自分で学ぶ力」が備わっていないかであることが多いはずである。）
- 段階4：**知識及び技能、思考力・判断力・表現力等を身に付けようとしている態度** 他者からのフィードバック（教師も含む）、集団（グループ）での討議などの後、自己の考えを修正する場面、またはその後「その考えになったのはなぜ？」というプロセスを問う場面（知識及び技能や思考力・判断力・表現力等と連動した見取り、プロセスを問う時は記録を取ることが望ましい）
 - ・必要な情報をあつめようとしている態度
 - ・これまでに学んだ方法を活用しようとする態度
 - ・フィードバックを受けて修正しようとしている態度
 - ・アドバイスをもらおうとする態度 など
- 段階6：**単元、内容のまとまりを通したまとめやふり返りの様子** 最初の自分と今の自分を比べる場面、単元を通したふり回り場面
 - ・課題に対する自分の考えをまとめようとしている態度（再学習しようとする姿）
 - ・終末課題に向けた準備（プロセス）の様子
 - ・ふり返りの記述から見える、プロセスの充実度（どのように学んできたのか）
例）目標や課題解決の達成状況はどれくらいだったか ・目標や課題解決に近づくために何をしてきたか
 - ・たてた目標は適切であったか ・自分が目標達成や課題解決に果たした役割は
 - ・次への修正点（次は何ができるようになりたいか？これからどうする？次の目標は？）など、**学びのプロセス（「どのように学んだか」）**についてふり回り、記録する
単元によっては、実生活に生かそうとする意識の高まりなどについてふり回り、記録する
 - ・生活場面での活用、実社会と関わろうとする意識の高まり

自ら学び、よりよい社会を考えようとする子どもの育成

主体的に学習に取り組む態度

主体的に学習に取り組む態度の評価イメージ

自分で学ぶ(学ぼうとする)力
+生活に生かす力

ワクワク問いたくなる状況作り(思考が動き始める自動装置)

子供による学習課題設定

「課題が届いている。目標を持っている」状態じゃないと、そもそも自己調整力が発揮できない。また、終末部のふり回り場面でも、何を振り返ればいいのか分からない

課題を見出す
予想を立てる
計画をたてる

記録

学びの実行(調べ・考える)

自分で作った考えや意見をもとに他者と対話し、再度自分と対峙する自己内対話を通して考えを付加・修正し再構成していく。

情報収集・整理・分析

集団(グループ)討議

他者のフィードバック

シンキングツール

情報収集等
学びのすべの活用
他者との関わり
関わり後の対峙

見取る

モニタリング・再学習・再構成(対峙する)

課題に対する結論を出すことで自分の学習の成果・到達度が表れる。この成果・到達度を子どもが自覚していないと、自分の学び方が良かったのか問題があったのかの判断ができない。

課題への準備
結論までの過程
達成状況

見取る

課題に対する結論の作成

学習のまとめと混同しないよう、「どのように学んだか」という学びのプロセスを振り返る。この時間がないと、自分の学び方を自分で改善していくことは難しい。

自分の考えの
ふりかえり
(変化の自覚)

自己の変容
理想との距離
何をしてきたか
次への展望

記録

ふり回りを実施するときの留意点

- ふり回るときに目標まで到達しなかった原因を自身の能力など修正不可能なことに向けないように配慮すること。こうなると、ふり回るときに自己効力感は低下し自分で学ぶ力どころか学習意欲そのものを失ってしまう。また、目標・課題があると、ここまではできるようになった自分に目を向けて自分の伸びをふり回ることができるが、最初に目標や課題の設定がされていないと、100%に到達できなかった場合、自分はできなかったというふり回りで終わってしまう。
- 言語力が乏しい小学生(特に低学年の時期)はふり回りはその日のうちにすべきであることが多い。時間が経つと、その時の気持ちを正確に表す言語表現ができない可能性が高い。乏しい言葉でも、その時であれば問い直すことによって、場所を指さしたり、具体的な場面を持ち出したりしてその子の真意を掘り出せるかもしれない。

おまけ① フィードバックは自己調整能力を伸ばす

学習へ向かう動機づけ方略の効果に従ってデータ分析がなされた結果、学習者の動機づけの高まりに最も大きな効果量はフィードバック方略によって示された。(Dignath,Buettner&Langfelbt,2008)

フィードバックとは…受け手の反応や評価

例) 体重計 体重計にのらないと1キロぐらいの変化にはなかなか気づかない。でものってその数字が出ることで気づくことができる。気づくから生活習慣や食生活を改善することができる。体重計はフィードバック装置といえる。

言葉だけがフィードバックではないということ。

フィードバックは自分を軸に返すのがポイント!!

それはいけん!⇒私はあなたがそれをしたら悲しい

ありがとう!⇒私は～だから助かった

授業、休憩、ノート、テストなど子どもにフィードバックする機会はたくさんあります。これをどう活用するかが良くも悪くも子どもの自己調整力に大きく影響するということです。

おまけ② 援助を求めるかも自己調整能力?

学習者の適応的援助要請が重要な自己調整スキルであることが明らかにされてきた。学業不振にある学習者らは、援助を求めることで自分たちの限界をさらすことになるという理由で、しばしば援助を求めたがらない。しかしながら、望ましい動機づけ信念を発展させた学習者(例:自己効力感)は、援助を求めることでより適応的な学習の循環につながるという自信があるため、援助を求める傾向が高い。(Newman,2008)

援助要請、つまり教えを請うことも自己調整の1つである。教えを請うということは自分の限界をさらすことになる。だから聞くのを躊躇するのである。これは「プライド」ではなく「見栄」である。そのため自分が学ぶことよりも、回避行動が優先される傾向にある。「聞きに行く勇気がない」「恥ずかしくて行けない」は回避行動の顕著な例である。この回避行動に対して、「言い出せないからしょうがない」などと他人が人工的に壁を作ってしまうのは、この学習者の自己調整力の伸びを大きく妨げることになる。

おまけ③ 自己調整につながる4段階

まず、その課題や事象に興味をもたないことには自己調整は始まらない。興味には、その場の状況から生まれる「状況的興味」と経験等から生まれる「個人的興味」の2種類がある。これらの興味は4段階の進行を経て自己調整へとつながると言われている。(Hidi&Renninger,2006)

段階1. 状況的興味が自発的に生じる

例) 友人のテニス選手に付いて一緒に公園に行くことを決める

段階2. 状況的興味が、環境によって維持される

例) 公園で、愛想のいいテニス選手によって興味が維持される

段階3. 外的なサポートなしに、課題や活動に繰り返し関与し始めるようになる

例) 自らテニス教室に申し込む

段階4. 発達した興味によって、課題や活動に取り組む機会を積極的に求めるようになる

例) 高レベルなスキルを身に付けようとするなど

全員に提案する時間がないので、分からないことは遠慮なく聞いてください。私たちも自分で学ぶ力=自己調整能力を発揮しながら、一緒に学んでいきましょう。

校務⇒教務・研究部⇒研究主任⇒「自己調整能力について」の中にこれを作成するための先行研究をまとめたもの(ただのメモ)等々が入っていますのでお知らせだけ。これはきっと役には立ちませんが。